

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 27 年 11 月 13 日	
所属部局・職	霊長類研究所 生態保全分野・修士課程 1 年
氏名	武 真祈子

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
大阪府吹田市 国立民族博物館
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
公開フォーラム「世界の博物館 2015」への参加
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 27 年 11 月 3 日
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
国立民族博物館、飯田卓准教授
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
<p>写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p> <p>国立民族博物館は、世界の博物館専門家を対象に、3 ヶ月間にわたる研修プログラム「博物館学とコミュニティ開発」を毎年実施している。今年度の参加者は、セーシェル、ペルー、アルメニア、フィジー、ミャンマー、パレスチナ、ヨルダン、エジプトの 8 カ国・地域から集まった 10 名である。今回の公開フォーラムは、それらの国々の博物館事情や課題に触れ、博物館の可能性を考えることを目的として開催された。</p> <p>報告者はアマゾンでのフィールドミュージアム計画に関わっているが、海外の博物館を訪れたことがない。そこで、日本以外の国で「博物館」というものがどういう存在なのかを知りたいと考え、このフォーラムに参加した。</p> <p>フォーラムは午後 1 時から午後 5 時で、10 名の研修生が各々の博物館活動について順に発表した。各 15 分の発表の後、5 分間の質疑応答がなされた。</p> <p>特に興味深かったのは、セーシェル自然史博物館の Nicole Sabrina Barreau さんの発表である。彼女は博物館教育プログラムの企画と実施を担当している。セーシェルでは近年、観光開発による環境破壊が問題となっているため、固有の自然の価値を学ぶ場所として自然史博物館が担う役割は大きい。Nicole さんは地元の自然保護団体や小学校と協力して希少植物の展示会を開催するなど、地域に根ざした博物館を目指して活動している。教育活動には伝統的な音楽やダンスも取り入れており、地域の子どもたちにとって博物館は遊びながら学べる場になっているようだ。課題は建物のメンテナンスや展示の拡充だが、資金と人員の不足がその障壁となっている。限られた人手と資金のなかでいかに効果的な展示をするか、というのは、博物館の種類や規模によらず常につきまとう問題だと思われる。セーシェルでは、パートナーシップを結んだ民間機関から援助を受けたり、リサイクル材を利用したりと地道な努力を続けているそうである。それでも、写真を見たところ建物は古くて小さく、展示も少し物寂しく感じた。見た目の美しさは本質的なことではないにしても、来館者にまた来たいと思ってもらうための重要なポイントである。人員の少ない小規模の博物館においては、自然史の知識や教育者としてのコミュニケーション能力だけでなく、展示作成のための技術・美術力も持ち合わせたバイタリティある人材が求められると感じた。</p> <p>発表者 10 人中 8 人は、遺跡や考古学系の博物館の職員だったため、報告者にとっては新鮮な話を聞くことができた。生き物を扱う展示に比べて、静かで壊れやすい出土品の展示は見せ方が難しいと感じた。実際、どの博物館でも、薄暗い部屋に淡々と「モノ」が並べられており、画一的な展示になっている印象を受けた。資料の性質上、展示自体はなかなか変えられないのであろう。</p> <p>一方で、教育プログラムにおいては様々な工夫の可能性があることがわかった。ユニークな活動を多くしていたのは国立エジプト文明博物館だ。市民が個人的なコレクションを持ち寄って、入手の経緯や自分自身について説明する企画展「私の持ち物・私のアイデンティティ」や、ミイラ制作に関するワークショップなどが例に挙げられる。また、ペルーのパチャカマック遺跡博物館では、インターネットを通じて情報を発信するバーチャル博物館の設置を計画しているようだ。世界中から観光客を呼び込んだり、来館者の知識を補ったりといった役割が期待できる、注目の取り組みである。質疑応答では、建物の中に収容することのできない、「遺跡」それ自体をどうやって保全していくのか、という議論がなされた。風雨による侵食だけでなく、金目当ての盗掘なども問題としてあるようだ。地域の経済事情や住民の暮らしも含めてまるごと保全していく必要がある。アマゾンのフィールドミュージアム計画でも地域社会の持続的発展を目標のひとつとしており、保全の対象は違っても、考え方として共通している点があると感じた。</p> <p>全体を通して、普段あまりなじみのない国々の博物館活動について知ることができ、よい機会だった。また、博物</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

館活動のノウハウを伝えるという民族博物館・琵琶湖博物館・JICA の取り組みも国際協力のあり方としてユニークで素晴らしいと思った。聞けば、20 年前から続いている取り組みだそうである。ぜひ来年度もフォーラムに参加して、また別の国々の博物館についての情報を得たいと思った。フォーラム後の交流会で人見知り癖を発動し、あまりたくさんの人とお話できなかったのが心のこりである。



フォーラムの様子



8 カ国から集った博物館職員

6. その他 (特記事項など)

フォーラムへの参加にあたり、PWS リーディングプログラムよりご支援をいただきました。松沢哲郎先生をはじめ関係者の皆様に御礼申し上げます。ありがとうございました。